

ムラブリ語の人称表現における体系性と双数形の無標性*

伊藤 雄馬

はじめに

本稿はタイ北部、及びラオス西部で話される、ムラブリ語^{*1} (Mlabri) の人称表現について、特にその体系を議論する。なお本稿では、人称表現を「人称を表す語、句などの言語学的単位」という意味で用いる。また、単数を表す人称表現を「単数形」と呼び、双数、複数についても同様に「双数形」、「複数形」と呼ぶことがある。

本稿の主張は以下の二点である。

- (1) 1. ムラブリ語の人称表現において、最も体系性の高い体系は、一人称/二人称、単数/双数を表す形式からなる体系である。
2. ムラブリ語の人称表現の一人称、二人称において、双数形は複数形よりも無標である。

Rischel (2007) によればムラブリ語はA, B, C方言に分けられる。その分類に従うならば、本稿で扱う方言はA方言とB方言である。なお、本稿で扱うA方言のデータは全て筆者のフィールドワークによるものである。

本稿の構成について述べる。まず、1章で先行研究の問題点を示す。2章では、問題を議論するための方法論を検討する。3章では前章で検討した方法を用いて、ムラブリ語の人称表現における体系を議論する。4章では体系から示唆された双数形の無標性について議論する。5章で本稿をまとめる。

* 本稿は、日本学術振興会（課題番号「254309」）の援助を受けて2013年8月から11月に行われた調査に基づく。日本学術振興会と調査に協力していただいたムラブリの皆様へ感謝する。また、吉田和彦教授、二名の匿名査読者から、大変有益なコメントをいただいた。この場を借りて感謝申し上げる。無論、本稿の誤りに関する責任は全て筆者にある。

^{*1} ムラブリ語はオーストロアジア語族、北方モン・クメール諸語、クム語派に属する。筆者の分析によるムラブリ語の音素目録を以下に示す。丸括弧で囲った音は強勢のない音節のみに現れる。[頭子音]/p, p^h, b, β, t, t^h, d, d̥, c[t̪c̪], j[d̪ʒ], k, k^h, g, ʔ; m, m̥, n, n̥, ŋ, ŋ̥; r, (r̥), l, l̥; s, h; w, y[j], ^ʔw, ^ʔy[^ʔj]/, [末子音]/p, t, c, k, ʔ; m, n, ŋ, r, r̥, l, l̥; ɕ, h; w, y[j]/, [母音]/i, e, ε, a, ɔ, o, u, ʊ, x, ʌ, (ə)/.

1 先行研究

ムラブリ語の人称表現について包括的な記述があるのは、B方言を扱う Rischel (1995: 148–151) のみである。Rischel (1995) は人称を表す表現を代名詞 (pronoun) と呼んでいるが、ここでいう代名詞は本稿で定義した人称表現と同じ意味で用いられている。よって本稿では、便宜のため、Rischel (1995) がいう代名詞を人称表現と読みかえ、提示することにする。

1.1 Rischel (1995)

Rischel (1995) の提示するムラブリ語B方言の人称表現を、筆者が表の形式に整理したものを以下に示す*2。

表 1 ムラブリ語B方言の人称表現 (Rischel 1995 より筆者作成)

	SG	DU	PL
1	ʔoh	ʔah	ʔah jum
2	meh	bah	bah jum, bah tiʔ
3	nɛʔ, ʔat tiʔ	ʔat ber	ʔat tiʔ

表 1 を見ると、ムラブリ語B方言の人称表現には、人称は一人称、二人称、三人称、数は単数、双数、複数を表す表現が存在することが分かる。

1.2 Rischel (1995) の問題点

Rischel (1995) は、ムラブリ語B方言について音韻論、形態論、統語論または意味論など広い範囲を扱っている。この本は現在においても唯一のムラブリ語文法書であり、ムラブリ語研究史の中で最も重要な研究書として位置づけられる。しかしその一方で、Rischel (1995) はその扱う範囲が広く、また主な関心がムラブリ語の言語学的系統の位置づけであったことから、共時的な記述や議論に周到さを欠いていることも事実である。

*2 Rischel (1995) と筆者は音素を表記する方法に異なる部分がある。例えば、無声鼻音を Rischel (1995) は/hn/, 筆者は/n̥/と表記する。ただし、音素の分析に関して両者はほぼ同じであるため、本稿では Rischel (1995) のデータを表記する場合も、筆者の表記方法に統一して提示する。

本稿で取り扱う人称表現に関しても、Rischel (1995) は十分な記述と議論を行っていない。本稿では、特に人称表現の体系に関する議論が不足していることを課題として取り上げる。

Rischel (1995: 148, 149) はムラブリ語の人称表現の内、一人称/二人称・単数/双数を表す形式からなる、いわゆる「2 × 2」の体系^{*3}を想定しうることを指摘している。その根拠として挙げているのが、体系に含まれる形式が全て単音節で末尾が声門摩擦音/h/で終わること、そして所有形式が存在することの二点である。

前者について、確かに全て単音節で末尾に/h/を持ち、これは四つの表現が体系をなすことを示唆する特徴であると筆者も考える（表1参照）。しかし、Rischel (1995) の挙げるB方言の語彙の内、単音節で末尾に/h/を持つ語彙は当該人称表現以外にも存在する。例えば「鼻」を表す *moh* がそうである (Rischel 1995: 354)。よって、単音節で末尾に/h/を持つという特徴は、体系を支持する強い根拠にはなりえないと考える。

後者の所有形式の存在という根拠についても問題がある。Rischel (1995) は所有形式として一人称・単数形の「私の」*?ot* と二人称・単数形の「あなたの」*met* を挙げているが、双数形の所有形式は挙げていない。よって、所有形式の存在も「2 × 2」の体系をなすという根拠にはならないと考える。

「定冠詞」*?at* が一人称・双数形の所有形式だとする可能性を Rischel (1995: 154, 2006: 100) は指摘しており、その指摘が正しければ、この定冠詞も所有形式のひとつに数えることが出来るかもしれない。しかし、いずれにしても二人称・双数形の所有形式は示されておらず、体系に含むとされる全ての形式に、対応するそれぞれの所有形式の存在が示されているわけではない。Rischel (1995) が挙げる所有形式と人称表現を、筆者がまとめて対応関係を明らかにしたものを (2) に示す。

(2)

	人称表現	所有形式	意味
1.SG	<i>?oh</i>	<i>?ot</i>	「私の」
2.SG	<i>meh</i>	<i>met</i>	「あなたの」
1.DU	<i>?ah</i>	<i>?at</i>	「(定冠詞)」
2.DU	<i>bah</i>	なし	—

以上で示したように、Rischel (1995) の示唆したムラブリ語の人称表現における「2 × 2」の体系は、その体系を支持する根拠が不十分であることが分かる。

加えて、「体系をなす」とはどういうことを指すのか、Rischel (1995) は明言しておらず、これも体系を議論する上で不徹底な点として挙げられるだろう。

^{*3} 本稿では、一人称・単数形、一人称・双数形、二人称・単数形、二人称・双数形の四つからなる体系を、『「2 × 2」の体系』と呼ぶ。

1.3 本稿の目的

前節では Rischel (1995) がムラブリ語の人称表現に「 2×2 」の体系を想定するものの、その根拠は不十分であることを示した。その背景を受け、本稿では、ムラブリ語の人称表現における体系について改めて検証することを目的とする。

ここで強調しておきたいのは、Rischel (1995) の示唆した体系が、人称表現に関する類型論的な一般化に反するよう見えることである。

人称表現についての類型論的な研究において、通言語的に双数は複数よりも有標であることは多くの研究によって指摘されている (Dixon 2012: 66, Greenberg 1963: 58, Harley & Ritter 2002: 497)。例えば例 (3) に提示する Greenberg (1963: 58) の類型論的一般化が有名である (下線は筆者による)。

(3) No language has a trial number unless it has a dual.

No language has a dual unless it has a plural.

Rischel (1995) の示唆した「 2×2 」の体系は、単数形と双数形からなる。しかし、ムラブリ語 B 方言の人称表現には、単数/双数/複数を表す形式が存在していた。つまり、この体系は双数形を含む一方で、複数形を含まない体系であることが分かる。

「ある同種の表現の内、体系に含まれる要素は含まれない要素よりも無標である」という立場が想定できる。これを「体系を重視する立場」と本稿では仮に呼ぶことにする。体系を重視する立場では、先行研究の示唆する「 2×2 」の体系は双数形が複数形よりも無標であることを示唆しており、類型論的に珍しいことが示される。つまり、ムラブリ語の人称表現における体系を議論することは、類型論の研究に資する可能性がある点で、議論するに値すると筆者は考える。

次章では、本稿の課題を議論するための方法について検討する。

2 方法論

本章では、ムラブリ語の人称表現における体系を議論する準備として、本稿で扱う対象を規定し、また体系を議論するための方法について検討する。

2.1 対象

本稿で対象とするのは、タイ王国のナーン県、ウィエンサー郡、メーカーニン区、フアイユアク村 (Ban Huai Yuak) で話される、ムラブリ語 A 方言である (付録参照)。

ムラブリ語A方言の人称表現を表2に示す。

表2 ムラブリ語A方言の人称表現

	SG	DU	PL
1	ʔoh	ʔah	ʔah t ^h ʏŋ
2	mɛh	bah	bah t ^h ʏŋ
3	mɔy	ʔak bɛr	jum ɲʌʔ

本稿では、この表2に挙げた人称表現を対象とする。

表1のRischel (1995)が示すムラブリ語B方言と比較すると、人称が一人称、二人称、三人称、数が単数、双数、複数を表す表現からなり、ムラブリ語B方言と同じ範囲を網羅することが分かる*4。その一方で、同じ機能でも形式が異なる表現が二方言間で観察されることがわかる。この相違点については、3章で改めて考察する。

2.2 方法の検討

本節では、ムラブリ語の人称表現における体系を議論する方法について検討する。

まず、先行研究の問題点として指摘した「体系をなす」とは何を意味するのか、筆者の立場を明確にしておく。筆者は「ある言語において、言語学的特徴を共有する言語形式群が存在するとき、その言語形式群は体系をなしている」という立場を取る。つまり筆者は「ムラブリ語の人称表現における体系を議論する」ということは、具体的には「ムラブリ語の人称表現の中で、言語学的特徴を共有する表現があるか、あるとすればどのような集団かを議論すること」であると考えている。

また二つ以上の体系が想定される場合、言語学的特徴をより多く共有する体系が、より「体系性が高い」と本稿では考えることにする。

2.2.1 先行研究で挙げられた根拠の再確認

前章で「2 × 2」の体系を想定する根拠としては不十分であるとしたRischel (1995)の根拠、すなわち単音節で末尾が/h/であること、そして所有形式が存在することの二点について、ムラブリ語A方言においても確認する必要があるだろう。

*4 指示対象の性質、例えば人間、動物、植物などの違いによって数の対立が変化する現象は今のところ観察されていない。

2.2.2 代名詞性による分類

先行研究で挙げられた根拠の確認に加えて、本稿では Sugamoto (1989) や Siewierska (2004: 9) の提案する「代名詞性」(pronominality) という言語学的特徴によって人称表現を分類する。代名詞性において同じ性質を共有する形式群が人称表現の中にあれば、それらは体系をなすと考えるのである。次節では代名詞性の説明を行う。

2.2.3 代名詞性の説明

Sugamoto (1989) は英語と日本語で代名詞 (pronoun) と同じ名前と呼ばれる語類が性質を異にすること、そして日本語の代名詞と呼ばれてきた語類が名詞的な性質を持つことに注目し、この代名詞性を設定し導入することで、それらの性質の違いを名詞-代名詞の連続体として記述できることを示した。

Sugamoto (1989) の指標を事実上引き継いだと考えられる Siewierska (2004: 9) は、Sugamoto (1989) の指標を整理し、英語と日本語に加えてポーランド語、タイ語を追加し、名詞-代名詞の連続体を記述している。

Siewierska (2004) の用いた指標は七点あるが、本稿ではその内、五点の指標を用いる。今回用いない二点の指標は「文法的人称の表示 (expression of grammatical person)」と「参照解釈における制限 (restrictions on reference interpretation)」である*⁵。前者は、ムラブリ語に人称による一致のような現象が存在しないため、指標として用いることが出来ない。後者は、現時点では調査が困難であるという理由から、本稿では指標として用いない。本稿で用いる五点の指標を (4) に示す*⁶。

- (4)
- a. 修飾不可能性
 - b. 形態論的恒常性の欠如
 - c. 直示的性質*⁷
 - d. スタイル・社会言語学的含意の欠如
 - e. 閉じた類

*⁵ 本稿で用いない指標についてはその説明を省く。Sugamoto (1989) または Siewierska (2004) を参照されたい。

*⁶ 本文では c. 以外は拙訳を用いている。英語による表現は以下の通りである。(a.) inability to take modifiers, (b.) lack of morphological constancy, (c.) lack of semantic content (d.) lack of stylistic and sociolinguistic implicative properties, (e.) closed class.

*⁷ 先行研究の指標では、これは「意味論的内容の欠如」と訳せる。しかし、査読者の一人から本稿で示す性質と整合性がないことを指摘され、筆者もそれに同意するため、本稿では「直示的性質」と呼ぶことにする。

以下では、英語の名詞、代名詞、日本語の名詞、人称名詞*⁸を例に各指標について説明する。

a. 修飾不可能性

「修飾不可能性」とは、限定詞、関係節などによってその語が修飾されえない性質をいう。

英語、日本語の名詞は限定詞によって修飾されうる (5, 6).

(5) the cat, this cat

(6) その猫, この猫

よって、英語、日本語の名詞は、限定詞については「修飾不可能性」の性質を持たない。

英語の代名詞は限定詞によって修飾することができない (7)。一方、日本語の人称名詞は限定詞によって修飾されうる (8)。

(7) *the he, *this she (Siewierska 2004: 10)

(8) その彼, この猫

よって、限定詞については、英語の代名詞は「修飾不可能性」という性質を持つが、日本語の人称名詞はその性質を持たない。

b. 形態論的恒常性の欠如

「形態論的恒常性の欠如」とは、単独の形態素からなり、それ以上小さい単位に分析できない性質を指すと筆者は理解する。例えば、複数を表す表現について、英語の名詞は基本的に接尾辞を用いる (9)。

(9) a. *the cat* - ϕ
ART 猫 -SG
「その猫」

b. *the cat* -s
ART 猫 -PL
「その猫たち」

*⁸ 田窪 (1996: 13) は、日本語には人称による一致が存在しないため、名詞とは別の品詞として代名詞を立てる必要はないとする。そのため、代名詞の代わりに「人称名詞」という用語を用いている。本稿でも田窪に倣い、日本語の人称を表す語類を人称名詞と呼ぶ。

複数を表す表現については、名詞と接尾辞に分けることができるため、英語の名詞は「形態論的恒常性の欠如」という性質を持たない。

一方で、英語の代名詞は複数を表すのに接尾辞を用いることができず (10a)、一人称・複数を表す代名詞は補充法による形式を用いる (10b)。

- (10) a. **I* -s
 1.SG -PL
- b. *We*
 1.PL
 「私たち」

複数を表す表現において、代名詞は接尾辞を用いて複数を表すことができず、補充法による形式はそれ以上分析できない。よって、複数を表す表現について、英語の代名詞は「形態論的恒常性の欠如」という性質を持つ (Siewierska 2004: 10)。

日本語の名詞は、基本的に「たち」などの形態素によって複数を表しうる (11)。

- (11) 猫 -たち
 猫 -PL
 「猫たち」

また、人称名詞の場合も同様に、一人称を表す「私」に「たち」を付け、一人称・複数を表すことができる (12)。

- (12) 私 -たち
 私 -PL
 「私たち」

つまり、名詞も人称名詞も複数を表す表現については、より小さい単位に分析することができる。以上から、複数を表す表現において、日本語の名詞、そして人称名詞はともに、「形態論的恒常性の欠如」という性質を持たない。

c. 直示的性質

「直示的性質」とは、直示的 (deictic) な性質を担うことをいう。

英語、日本語の名詞は、「直示的性質」を基本的には持たないと筆者は考える。

一方、以下の (13-15) に示す英語の代名詞と日本語の人称名詞の例は、話し手自身、聞き手を固定的に指している (田窪 1996: 14).

- (13) A. I am Jacob. Nice to meet you.
B. I am Sophia. Nice to meet you, too.

(筆者作成)

- (14) 甲 私も馬鹿でした。
乙 そうです。私も馬鹿でした。

(田窪 1996: 14)

- (15) 甲 あなたが間違っている。
乙 いや、あなたが間違っている。

(田窪 1996: 14)

(14) の日本語の例でいえば、甲の発言にある「私」は話し手である甲を指し、乙の発言にある「私」も話し手である乙を指している。つまり、「私」はいずれの場合もその話し手を固定的に指している。例 (13, 15) における代名詞、人称名詞も同様に話し手、聞き手を固定的に指している。この観察から、英語の代名詞と日本語の人称名詞は両方とも「直示的性質」を持つといえる (田窪 1996: 16-17)。

d. スタイル・社会言語学的含意の欠如

「スタイル・社会言語学的含意の欠如」とは、その表現がスタイルや話し相手、状況などの違いを表さないことをいう。

英語の名詞は、命題的意味は同じだが、社会言語学的な差異が見られる語が観察されるため、「スタイル・社会言語学的含意の欠如」という性質を持たない (16a)。日本語の名詞も同様であると筆者は考える (16b)。

- (16) a. *mother* vs *mummy* vs *mum* (Siewierska 2004: 10)
b. 母 vs お母さん vs ママ

一方、英語の代名詞は、「スタイル・社会言語学的含意の欠如」という性質を持つとされる (Siewierska 2004: 10)。日本語の人称名詞は、「僕、私、おら」など複数存在し、話し手と聞き手の関係によって使い分けられる。例えば、これまで「僕、君」と呼び合っていた友人のひとりが、「おれ、おまえ」と呼び出した場合、呼ばれた方も「おれ、おまえ」と呼ぶようにしなければ、不自然である (田窪 1996: 15)。よって、日本語の人称名詞は「スタイル・社会言語学的含意の欠如」という性質を持たない。

e. 閉じた類

「閉じた類」とは、借用などによって語彙が増減しない語類のことを指す。

英語、日本語の名詞は他の言語から借用しうるため「閉じた類」とはいえない。英語の代名詞は新たに追加されることは基本的になく、「閉じた類」である (Siewierska 2004: 10)。一方、日本語の人称名詞は例えば英語から一人称として「ミー」などを借用できるため、「閉じた類」とはいえない (田窪 1996: 14)。

2.2.4 代名詞性のまとめ

英語と日本語の名詞、英語の代名詞、日本語の人称名詞の代名詞性を以下の表 3 に示す。(a. 修飾不可能性, b. 形態論的恒常性の欠如, c. 直示的性質, d. スタイル・社会言語学的含意の欠如, e. 閉じた類)

表 3 英語と日本語の代名詞性

		a	b	c	d	e
英語	代名詞	<u>yes</u>	<u>yes</u>	<u>yes</u>	<u>yes</u>	<u>yes</u>
日本語	人称名詞	no	<u>yes</u>	no	no	no
英語・日本語	名詞	no	no	no	no	no

英語の代名詞と日本語の人称名詞は、その代名詞性が異なることが分かる。さらに、名詞と英語の代名詞を両極端とする連続体を想定すると、日本語の人称名詞は英語の代名詞よりも名詞に近い性質を持つことが分かる。

2.2.5 文法性判断

以上で説明した代名詞性を本稿では導入するが、その代名詞性の検証には、文法性判断が必要になる。本節では、本稿で用いる文法性判断の基準を定め、明示する*9。

本稿では文法性を連続的なものと想定し、「母語話者による容認可否の判断 (以下、容認テスト)」と、「自然談話で観察されたか否か」の二点を参考に、連続体を四段階に分け、文法性の高いものから「高」、「やや高」、「やや低」、「低」を設定する。

*9 この基準は十分なものでなく、更なる検討を要することは筆者も認めるところである。しかし、暫定的なものであれ本稿の従う基準を明示することは議論の追認性を保証するために必要であるという筆者の考えから、明示することにする。

「高」は容認テストで容認可能とされ、かつ自然談話にて観察された例で、何も印をつけずに示す。

「やや高」は容認テストでは容認可能とされるが、自然談話では観察されない例で、クエスチョンマーク「?」を付けて示す。

「やや低」は容認テストで容認されないが、自然談話では観察される例で、クエスチョンマークとアスタリスクの両方「?*」を付けて示す^{*10}。

最後に、「低」は容認テストで容認されず、自然談話においても観察されない例で、アスタリスク「*」を付けて示す。

指標とその示し方を整理し、表 4 に示す。

表 4 文法性判断の基準とその示し方

文法性	容認テスト	自然談話	示し方
高	<u>yes</u>	<u>yes</u>	
やや高	<u>yes</u>	no	?
やや低	no	<u>yes</u>	?*
低	no	no	*

以下より示すムラブリ語A方言の例は、表 4 で示した基準に従って文法性判断の結果を明示するものとする。

3 体系の検証

本章では、前章で検討した方法に従い、ムラブリ語A方言の人称表現における体系について議論する。まず、先行研究が提示した根拠を、ムラブリ語A方言についても再検証し、次に代名詞性を用いて、ムラブリ語の人称表現を分類し、体系が現れるかどうかをみる。

3.1 先行研究の再検証

Rischel (1995) がムラブリ語の人称表現における体系を支持する根拠として挙げた、形式と所有形式の有無について、ムラブリ語A方言についても再び検証する。

^{*10} 「容認テスト」を「自然談話で観察されたか否か」より優先する理由は、自然談話で観察された発話が言い間違いである可能性を排除できないためである。

3.1.1 形式

形式については先行研究と同様、ムラブリ語A方言でも、一人称/二人称、単数/双数を表す形式は全て単音節で、末尾に/h/を持つ(表2参照)。ただし、ムラブリ語A方言にも単音節で末尾の/h/を持つ語は他にも存在する。例えば、「鼻」 *mɔh*, 「来る」 *leh*, 「切りつける」 *bih* などがそうである。よって、ムラブリ語A方言でも形式は体系を支持する強い根拠にはならないと考える。

3.1.2 所有形式の有無

所有形式の有無については、先行研究と異なる結果となった。Rischel (1995) が所有形式として挙げたものに加えて、二人称・双数形の人称表現に由来すると思われる所有形式がムラブリ語A方言では確認することができた(17下線部)。

(17)

	人称表現	所有形式	意味
1.SG	?oh	?ot	「私の」
2.SG	meh	mɛt	「あなたの」
1.DU	?ah	?at	「(定冠詞)」
2.DU	bah	<u>bak</u>	「彼・彼女らの」

この二人称・双数形の人称表現に由来すると思われる所有形式は、「彼・彼女らの」という意味を表す(18)。

(18) bak kɔk bak knɔul bay trɔp
 彼・彼女らの パイプ 彼・彼女らの 臀部 大きい 大きい
 「彼・彼女らの(煙草の)パイプ, 彼・彼女らの臀部はとても大きい」

二つの双数形に由来すると思われる所有形式である定冠詞 ?ak と「彼・彼女らの」 bak は、いずれも意味的な対応が不透明であるため、人称表現とは関係のない形容詞類などに分類できる可能性も検討すべきである。

しかし、形容詞類である可能性は、以下の三点により排除できる。

一点目は、形式が単数形の所有形式と並行的なことである。所有形式と思われる形式は、全て末尾が軟口蓋閉鎖音 k であり、それ以外の部分は人称表現と一致する(17参照)。

二点目は、二人称・双数形の所有形式については所有を表す形式であることである。

三点目は、統語位置である。形容詞類が名詞に後続するのに対し、所有形式、また定冠詞と「彼・彼女らの」を表す形式は名詞に前置される(19)。

- (19) a. *brɔŋ ʔay tak*
 犬 小さい
 「小さい犬」
- b. *ʔok/mɛk brɔŋ*
 私の/あなたの 犬
 「私の/あなたの犬」
- c. *ʔak/ʔbak brɔŋ*
 定冠詞/彼・彼女らの 犬
 「その/彼・彼女らの犬」

よって、所有形式、定冠詞、そして「彼・彼女らの」を表す形式は統語位置が全て同じであることがわかる。

以上の三点から、「私の」、「あなたの」、定冠詞、そして「彼・彼女らの」を表す四つの形式は、形容詞類ではなく人称表現に由来する所有形式という別の語類をなすと考える。

対応する所有形式を持たない人称表現、また名詞類は、拘束形式 *di*-^{*11}を用いて所有関係を表すしか方法はない^{*12} (20)。

- (20) *ʔah tʰɤŋ/ʔbah tʰɤŋ/mɔy/ʔak bɛr/jum ɲɔʔ di- grux*
 1.PL/2.PL/3.SG/3.DU/3.PL の 物
 「私たち/あなたたち/彼・彼女/彼・彼女ら二人/彼・彼女らの物」

以上の議論から、ムラブリ語A方言における人称表現の内、一人称/二人称、単数/双数を表す形式は、「対応する所有形式を持つ」という言語学的特徴を共有しているため、これを根拠に Rischel (1995) の示唆した「2 × 2」の体系を想定できると考える。

次節からは、代名詞性による分類から人称表現の体系について議論していく。

3.2 代名詞性による分類

本節では、まずムラブリ語A方言の人称表現を代名詞性によって分類を試み、その後、分類結果から人称表現の体系を考察する。

^{*11} 拘束形式 *di*-は多機能である。詳細は別稿に譲るが、本稿で挙げる例は全て所有関係を表す用法であるため、本稿では「の」というグロス表記で統一する。

^{*12} 対応する所有形式を持つ人称表現も、人称表現と拘束形式 *di*-の組み合わせで所有を表すことは可能である。例えば「私の犬」は“*ʔoh di-brɔŋ* (1.SG の 犬)”とも言える。

代名詞性による分類の結果、ムラブリ語A方言の人称表現は四つのグループに分類できる。以下、そのグループをAグループ、Bグループ、Cグループ、Dグループと呼ぶことにする。分類の結果を表5に示す。(a. 修飾不可能性, b. 形態論的恒常性の欠如, c. 直示的性質, d. スタイル・社会言語学的含意の欠如, e. 閉じた類)

表5 ムラブリ語人称表現の代名詞性による分類

グループ	人称表現	a	b	c	d	e
Aグループ	1.SG/DU, 2.SG/DU	<u>yes</u>	<u>yes</u>	<u>yes</u>	<u>yes</u>	<u>yes</u>
Bグループ	3.SG	no	<u>yes</u>	<u>yes</u>	<u>yes</u>	no
Cグループ	1.PL, 2.PL	no	no	<u>yes</u>	<u>yes</u>	no
Dグループ	3.DU, 3.PL	<u>yes</u>	no	<u>yes</u>	<u>yes</u>	no

Aグループは一人称/二人称・単数/双数を表す四つの表現からなり、本稿で採用した全ての代名詞性を満たすほど代名詞的である。Bグループは三人称・単数形のみからなり、「修飾不可能性」と「閉じた類」の性質を除き、全ての性質を満たすほど代名詞的である。Cグループは一人称/二人称・複数形の二つの表現からなり、「直示的性質」と「スタイル・社会言語学的含意の欠如」の二つの性質を満たすほど代名詞的である。Dグループは三人称・双数形/複数形の二つの表現からなるグループであり、「形態論的恒常性の欠如」、「閉じた類」の性質を除く全ての性質を満たすほど代名詞的である。以下からは、表5のように判断した根拠となる議論を示す。

a. 修飾不可能性

関係節と共起できるか、文法性判断を行った。ムラブリ語では、関係節は名詞に後続する (21)。

- (21) *mɪaʔ ni leh t^hwa tɛmlaʔ*
 人 REL 来る 昨日 誰
 「昨日来た人は誰？」

AグループとDグループは関係節と共起できない (22, 23)。

- (22) **ʔoh/*mɛh/*ʔah/*bah ni leh t^hwa*
 1.SG/2.SG/1.DU/2.DU REL 来る 昨日
- (23) **ʔak bɛr/*jum ɲaʔ ni leh t^hwa*
 3.DU/3.PL REL 来る 昨日

BグループとCグループは関係節と共起できる (24, 25).

- (24) *məy ni leh t^hwa*
 3.SG REL 来る 昨日
 「昨日来た人」
- (25) *?ʔah t^hɣŋ/bah t^hɣŋ ni leh t^hwa*
 1.PL/2.PL REL 来る 昨日
 「昨日来た私たち/あなたたち」

以上の観察から、AグループとDグループは「修飾不可能性」という性質を持ち、BグループとCグループはその性質を持たないと考える。

b. 形態論的恒常性の欠如

AグループとBグループは、それ以上小さい単位に分析できない*¹³ (26).

- (26) *?oh/mɛh/?ah/bah/məy*
 1.SG/2.SG/1.DU/2.DU/3.SG
 「私/あなた/私たち二人/あなたたち二人/彼・彼女」

よって、AグループとBグループは「形態論的恒常性の欠如」という性質を持つと考える。

Cグループは一人称/二人称の双数形と数詞「五」*t^hɣŋ*にそれぞれ分析できる*¹⁴ (27).

- (27) *?ah/bah t^hɣŋ*
 1.DU/2.DU 五
 「私たち/あなたたち」

よって、Cグループは「形態論的恒常性の欠如」という性質を持たないと考える。

なお、Cグループに見られる数詞「五」の用法は通常の使用とは異なり、慣習的な用法であることを指摘しておく。まず、例(28)のように一人称/二人称・双数形以外の人称表現や、「人」などの普通名詞に、数詞「五」のみを後続させて、複数の意味を表すことはムラブリ語ではできない。

*¹³ 三人称・単数形は数詞「一」と同形である。

*¹⁴ 例(27)では分析できることを示すために、臨時的にグロス表記を変更してある。

- (28) a. *ʔoh/*mɛh/*mɔy/*ʔak ber t^hɣŋ
 1.SG/2.SG/3.SG/3.DU 五
- b. *mlaʔ t^hɣŋ
 人 五

通常、普通名詞についての数量を表すときは、数詞と類別詞を共に用いる (29a)。また普通名詞については、双数を表す特別の形式はなく、他の数と同じく、数詞と類別詞を用いる表現となる (29b)。なお、数詞「四」*pon* は、「四人」、「四つ」という意味も表すが、「たくさんの」という意味が普通である (29c, d)。

- (29) a. *kwaŋ t^hɣŋ mlaʔ*
 部外者 五 CL:人
 「部外者五人」
- b. *kwaŋ ber mlaʔ*
 部外者 二 CL:人
 「部外者二人」
- c. *kwaŋ pon mlaʔ*
 部外者 四 CL:人
 「たくさんの部外者/四人の部外者」
- d. *pleʔ pon kloʔ*
 実 四 CL:人以外
 「たくさんの実/四つの実」

Dグループもより細かい単位に分析できる。三人称・双数形が定冠詞と数詞「二」に、三人称・複数形が「集団」*jum* と限定詞 *ɲaʔ* に分析できる^{*15} (30)。

- (30) a. *ʔak ber*
 定冠詞 二
 「彼・彼女ら二人」
- b. *jum ɲaʔ*
 集団 DET:遠称
 「彼・彼女ら」

よって、Dグループは「形態論的恒常性の欠如」という性質を持たない。

^{*15} 例 (30) では分析できることを示すために、臨時的にグロス表記を変更してある。

三人称・双数形は、タイ系言語から借用された数詞「二」 *səŋ* を代わりに用いることは出来ない (31a)。また、本来語・借用語いずれの数詞であっても、「二」以外の数詞と定冠詞の組み合わせによって、人称表現を表すことはできない (31b)。

- (31) a. *ʔak *səŋ*
定冠詞 二 (借用語)
- b. *ʔak *pɛʔ/sam*
定冠詞 三/三 (借用語)

つまり、三人称・双数形は、慣習的な表現であると考ええる。

三人称・複数形は、専ら人称表現として用いられるのに対し、限定詞を近称に代えた例 (32) の表現は、「この集団」という字義通りの意味しか普通表しえない。

- (32) *jum gəh*
集団 DET:近称
「この集団/*私たち/*あなたたち/*彼・彼女ら」

よって、三人称・複数形も慣習的な用法であると考ええる。

以上の議論から、AグループとBグループは「形態論的恒常性の欠如」を持つが、CグループとDグループはその性質を持たないと考える。加えて、「形態論的恒常性の欠如」という性質を持たないCグループとDグループは、分析して得られたそれら形態素の用法が、通常用法とは異なり、慣習的な用法である点を指摘しておく^{*16}。

c. 直示的性質

聞き取り調査と参与観察から、全ての人称表現は話者自身や話し手、もしくは第三者を固定的に表す。よって、全ての人称表現は、「直示的性質」を持つと考える。

d. スタイル・社会言語学的含意の欠如

聞き取り調査と参与観察から、いずれの人称表現にもスタイルによる使い分けや、社会言語学的な含意を示す明確な根拠は見つけられなかった^{*17}。よって全ての人称表現は「スタイル・社会言語学的含意の欠如」という性質を持つと考える。

^{*16} これは「文法化」の一種とも捉えられるだろう。この問題については別稿に譲る。

^{*17} ただし、ある一人の協力者から、「二人称・単数形 *mɛh* は、親密な異性にのみ用いるべきである」という見解を得ている。しかし、ムラブリ全ての人がこの見解に同意するわけではなく、また参与観察においてもそのような事実は観察できなかったため、これを社会言語学的含意が存在する根拠とはしなかった。

e. 閉じた類

Rischel (1995) が示したB方言の人称表現と、筆者が示したA方言の人称表現を比較すると、一人称/二人称、単数/双数を表す形式、つまりAグループのみが両方言において完全に同じ形式である*¹⁸ (表1, 表2 下線部).

表1 ムラブリ語B方言の人称表現 (Rischel 1995 より筆者作成): 再掲

	SG	DU	PL
1	<u>ʔoh</u>	<u>ʔah</u>	ʔah jum
2	<u>mɛh</u>	<u>bah</u>	bah jum, bah tiʔ
3	ɲɛʔ, ʔat tiʔ	ʔat bɛr	ʔat tiʔ

表2 ムラブリ語A方言の人称表現: 再掲

	SG	DU	PL
1	<u>ʔoh</u>	<u>ʔah</u>	ʔah t ^h ɲɪ
2	<u>mɛh</u>	<u>bah</u>	bah t ^h ɲɪ
3	mɔy	ʔak bɛr	jum ɲʌʔ

よって、二方言間で同じ形式を示すAグループのみが「閉じた類」と判断しうる.

3.3 代名詞性による体系の考察

ムラブリ語の人称表現は代名詞性によって四つのグループに分類可能であることを示した. この代名詞性による分類を用いて二通りの観点から体系を想定することができる.

まず, グループ分けによる体系の想定, 表5でいうと横軸をもとに分類する方法である. 例えばグループ毎に「代名詞性において等しく代名詞的である」という言語学的特徴を共有することによって体系を想定することができる. つまり, この観点からはA, B, C, Dグループの各グループが, 単独でひとつの体系をなしていると考えられる.

*¹⁸ 三人称・双数形も, 定冠詞と数詞「二」からなる点では一致するが, 形式が若干異なる.

もう一つは「代名詞性」による体系の想定、表5でいうと縦軸をもとに分類する方法である。例えば、「形態論的恒常性の欠如」の性質を共有するような体系としてAグループとBグループをあわせた集団がひとつの体系をなす、と想定することも可能であるし、「直示的性質」と「スタイル・社会言語学的含意の欠如」の二つの言語学的特徴を共有することを理由に、全ての人称表現がひとつの体系をなす、と考えることも可能である。この観点からは、「修飾不可能性」を共有するA、Dグループからなる体系、「形態論的恒常性の欠如」を共有するA、Bグループからなる体系、「直示的性質」、「スタイル・社会言語学的含意の欠如」を共有するA、B、C、Dグループからなる体系、そして「閉じた類」を共有するAグループのみからなる体系、この四つの体系を想定できる。

想定できるこれらの体系の中で、どちらの観点からもその体系が示唆されている唯一の体系は、Aグループのみからなる体系である。そして、Aグループは一人称/二人称・単数/双数を表す形式からなるグループであり、これは「2×2」の体系と一致する。

つまり、代名詞性による分類の結果、いくつかの体系が想定でき、またその中でも「2×2」の体系が最も体系性の高い体系であることがわかる^{*19}。

3.4 体系の検証のまとめ

本章では、ムラブリ語A方言を対象に、人称表現における体系について議論した。その結果、一人称/二人称・単数/双数を表す形式からなる「2×2」の体系が、所有形式を持つこと、代名詞性において等しく代名詞的であること、「閉じた類」であること、この三点から支持されること、そしてムラブリ語の人称表現に想定される体系の中で最も体系性の高い体系であることを示した。

4 双数形の無標性

ここまでの議論で、ムラブリ語の人称表現に想定される体系の内、「2×2」の体系が最も体系性の高い体系であることを示した。

冒頭で述べたように、体系を重視する立場では、ムラブリ語のこの体系は、一人称/二人称において双数形が複数形よりも無標であることを示唆する、

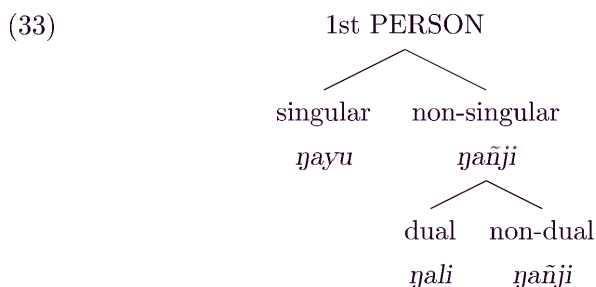
本章では、このムラブリ語の人称表現に示唆される双数形の無標性について、意味的、形式的な観点から簡便な考察を行う。

^{*19} また、Aグループは最も代名詞性の高いグループであることにも注目すべきであろう。

4.1 意味的な観点

まず、意味的な観点から考察する。どちらか一方が意味的に他方を包摂する関係にある場合、包摂する方が包摂される方よりも無標であると考ええる。

例えば Dixon (2012: 66) は、イディン語 (Yidiñ) の一人称代名詞を例に、双数形の意味的な有標性について紹介している。イディン語において、一人称・双数形 *ɲali* は「話し手を含む二人」を指す。一方で、一人称・非-単数形 (non-singular) *ɲaŋji* は「話し手を含む二人以上の人」を指す。よって、双数形は非-単数形を意味的に排除せず、非-単数形は双数形を意味的に包摂する。その関係をダイアグラムで表したものを例 (33) に示す (Dixon 2012: 66)。



このことから、イディン語では非-単数形が双数形よりも無標であるといえる。

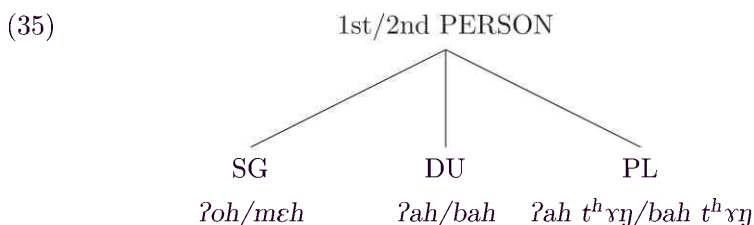
一方、ムラブリ語では、一人称/二人称において、双数の意味で複数形を用いることはできない。またその反対も同様に、複数の意味で双数形を用いることもできない。これは、一人称/二人称・複数形に「二人」、また一人称/二人称・双数形に「三人」を付けて修飾できないことから端的に示される*²⁰ (34)。

- (34) a. *ʔah t^hɲɲ/*bah t^hɲɲ ber mlaʔ
 1.PL/2.PL 二 CL:人
- b. *ʔah/bah pɛʔ mlaʔ
 1.DU/2.DU 三 CL:人

つまり、意味的な観点からは、一人称/二人称の双数形と複数形は互いに独立した関係にあり、どちらか一方が他方を包摂する関係にはないことがわかる。

*²⁰ 一方、三人称については、複数形に「二人」を付けて修飾することができる一方で、双数形には「三人」を付けて修飾することができない。よって、三人称については複数形が双数形より無標であることが分かる。

加えて、一人称/二人称・複数形は「二より大きい数 (more-than-two)」と分析する方がより正確であることも分かる。その関係をダイアグラムで表したものを例 (35) に示す。



よって、意味的な観点からは一人称/二人称の双数形、複数形のどちらがより有標、無標であるか判断できない。

4.2 形式的な観点

次に形式的な観点から考察を試みる。形態論的に、より単純な構造を持つ方が無標であると考えられる。これは Croft (2002: 126) が、双数を表す形式は複数を表す形式よりも形態素の数において同等か、より多いという類型論的一般化を提案していることから分かる (36)。

- (36) If the dual is coded with a certain number of morphemes, then the plural is coded with at least as many morphemes.

しかし、一人称/二人称において、ムラブリ語の複数形は、双数形に数詞の「五」を付けた表現となっており、複数形の方が形態素の数が多い*21 (37)。

- (37) ?ah/bah tʰɣŋ
 1.DU/2.DU 五
 「私たち/あなたたち」

さらに、複数形は一人称、二人称のいずれともが双数形をもとに形成されている点も重要である (37 参照)。これも、ムラブリ語において双数形が複数形よりも無標な形式であることを支持する事実であろう*22。

よって、形態論的複雑性、また複数形が双数形をもとに形成されていることから、一人称/二人称において双数形は複数形よりも無標であると考えられる。

*21 例 (37) では分析できることを示すために、臨時的にグロス表記を変更してある。

*22 三人称・双数形/複数形はいずれも二つの形態素からなり、形式的な観点からはどちらがより有標、無標かは判断できない。

4.3 本章のまとめ

本章では、体系を重視する立場からの示唆に加えて、意味的・形式的な観点からも、ムラブリ語人称表現の一人称/二人称において、双数形の無標性が示されるか検討した。意味的な観点からは、双数形と複数形はどちらが有標、無標かは判断できないことがわかった。形式的な観点からは、双数形が複数形よりも無標であることが示された。つまり、双数形が複数形よりも無標である根拠は見出せても、複数形が双数形よりも無標である根拠を見出すことはできなかった。

以上の議論から、ムラブリ語の人称表現の一人称/二人称において、双数形は複数形よりも無標であると本稿は主張する。

5 まとめと課題

本稿では、先行研究において示唆されていたムラブリ語の人称表現における体系について、A方言を対象に先行研究の示した根拠を再検証し、また代名詞性という指標を導入してその体系を再検証した。その結果、先行研究で示唆された「2×2」の体系、すなわち一人称/二人称、単数/双数を表す形式からなる体系が最も体系性の高いことを示した。加えて、体系性、意味、形式の観点から、一人称/二人称については、双数形が複数形よりも無標であることを示した。

課題として、本稿で示した体系や双数形の無標性が何を意味するのかを本稿では考察しなかったことがまず挙げられる。また、本稿では共時的記述に徹したが、通時的、比較言語学的な視点を導入することも必要だろう。今後の課題とする。

記号・略号

- 接辞境界; 1 一人称; 2 二人称; 3 三人称; ART 冠詞; CL 類別詞; DET 限定詞;
DU 双数; PL 複数; REL 関係節導入辞; SG 単数

参考文献

- Croft, William (2002) *Typology and Universals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R. M. W. (2012) *Basic Linguistic Theory* 3. New York: Oxford University Press.
- Greenberg, Joseph H. (1963) Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements. In : Denning, Keith and Suzanne Kemmer (eds.) (1990) *On Language: Selected Writings of Joseph H. Greenberg* 40-70. Stanford, California: Stanford University Press.
- Harley, Heidi & Elizabeth Ritter (2002) “Person and Number in Pronouns: A Feature-Geometric Analysis.” *Language* 78: 482–526.
- Nimonjiya, Shu (forthcoming) “Another History of Chao Khao: The Mlabri in Northern Thailand.” *Aséanie*.
- Rischel, Jørgen (1995) *Minor Mlabri: A Hunter-gatherer Language of Northern Indochina*. Copenhagen: Museum Tusulanum Press.
- Rischel, Jørgen (2006) “The ‘Definite Article’ in Mlabri.” *Mon-Khmer Studies*. 36: 61–102.
- Rischel, Jørgen (2007) *Mlabri and Mon-Khmer: Tracing the History of a Hunter-gatherer Language*. Historisk-Filosofiske Meddelelser 99. Copenhagen: The Royal Danish Academy of Science and Letters.
- Siewierska, Anna (2004) *Person*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sugamoto, Nobuko (1989) “Pronominality: A Noun-Pronoun Continuum.” Corrigan, Roberta, Fred R. Eckman and Michael Noonan (eds.) *Linguistic Categorization: Proceedings of an International Symposium in Milwaukee, Wisconsin, April 10–11, 1987*, 267–291. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- 田窪行則 (1996) 「日本語の人称表現」 田窪行則 (編) 『視点と言語行動』, 13–44. 東京: くろしお出版.

付録

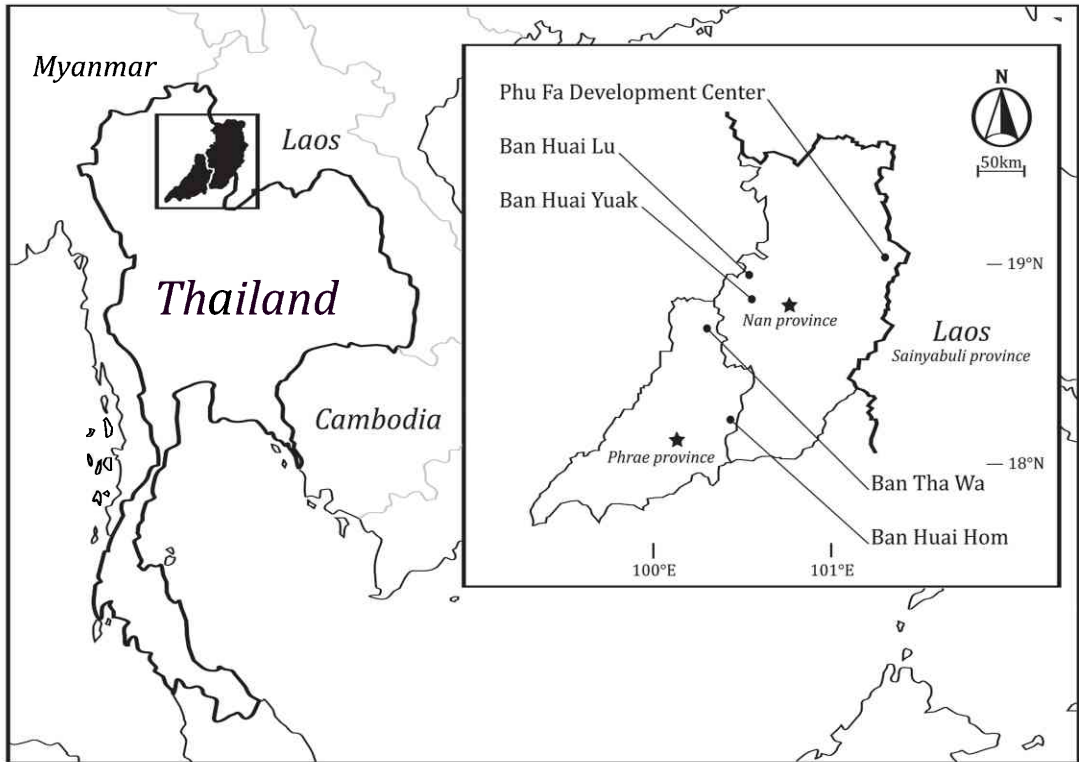


図1 調査地 (Ban Huai Yuak) とその他のムラブリ居住地 (Nimonjiya forthcoming)

Abstract

System of Personal Expression and Unmarkedness of Dual Forms in Mlabri

This study addresses the system of personal expression in Mlabri language, which belongs to the Khmuic branch of northern Mon-Khmer and Austroasiatic languages, as spoken in northern Thailand and Western Laos.

Our claim are as follows:

In Mlabri personal expression:

Claim 1: the system is “1/2” and “SG/DU” and

Claim 2: the dual form may be more unmarked than plural.

Although the system consists of “first/second person” and “singular/dual” as suggested in previous research, yet there has not been sufficient evidence in support of the system in personal expressions to address “first/second/third person” and “singular/dual/plural”.

According to my research on the A-dialect of Mlabri in Thailand, the system is confirmed by the fact that (1) each expression within the system has a possessive form, that (2) they show the highest “pronominality” (articulated by Sugamoto 1989) among personal expressions and that (3) they are “closed class”.

In addition, the system suggests that the dual form may be more unmarked than plural in Mlabri personal expressions. It is worthy of further investigation because it is well known that typologically, dual is marked rather than plural.

受領日 2013年10月2日
受理日 2013年12月19日